九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現行民法典を創った人びと（25）組織改編後の委員1・2：河村譲三郎・富谷鉎太郎

七戸，克彦
九州大学大学院法学研究院：教授

https://hdl.handle.net/2324/20037

出版情報：法学セミナー. 56 (5), pp.45-47, 2011-05-01. NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：

現行民法典を創った人びと[25]

九州大学教授 七戸克彦

法学セミナー
2011/05/no.677

1｜法典調査会は、その設立から1年を経た明治27年3月27日勅令30号「法典調査会規則ノ改正」をもって組織構造が変更され、審議短縮のため主査委員・査定委員の区別は廃されて同年3月31日再編前の50名のメンバー中から「委員」31名が任命され、主査委員会・総会の2回審議も1回審議に統合される。

2｜なお、委員の数は35人以内とされ（改正規則2条）、①4月26日には中村元嘉が追加任命、②12月26日には西源四郎が加わり33名。③翌28年には5月1日星亨の重岡薫五郎への交替の後、④12月12日岡野敬次郎が入って34名。翌29年9月18日第2次松方正義内閣成立直後の⑤9月24日本野一郎が外れ、⑥司法大臣となった清浦奎吾が11月5日副総裁に就任したため32名。翌30年⑦1月20日には伊藤博文幕下の末松謙澄・伊東巳代治のほか三崎亀之助・山田喜之助・木下広次が外れて、神鞭知常・河村譲三郎・富谷鉎太郎・渋沢栄一・阿部泰蔵・鶴原定吉に代わり、⑧4月10日西源四郎が外れた後、⑨9月17日加藤正義、⑩9月22日内田嘉吉が入って34名、⑪10月28日神鞭の法制局長官辞任後、⑫11月25日寺尾亨が加わるも、⑬12月1日箕作麟祥が死去、翌31年1月12日第3次伊藤内閣成立後（21日伊藤首相・西園寺公望文相が総裁・副総裁就任、その後副総裁は3月30日曾禰荒助法相に交替）、⑭1月24日には横田国臣も抜けるが、⑮2月9日小宮三保松、⑯2月12日倉富勇三郎を補充して委員は34名となる。そして同年6月20日第12議会解散・内閣総辞職の翌21日に民法親族編・相続編が公布され、7月16日前三編とともに施行された。

法典調査会規則（旧）4条区分	明治27年3月31日付		その後の任命（15人（復活4人を含む）・うち2人途中免）
	自然消滅（非継続）（19人）	任命（継続）（31人・うち10人途中免）	
高等行政官司法官	斯波淳六郎（法制局参事官）	清浦奎吾（司法次官）〔貴〕→⑥29.11.5副総裁 末松謙澄（法制局長官）〔貴〕→⑦30.1.20免 伊東巳代治（内閣書記官長）〔貴〕→⑦30.1.20免 金子堅太郎（農商務次官）〔貴〕 奥田義人（内閣官報局長） 都筑馨六（内務省参事官） 本野一郎（外務省参事官）→⑤29.9.24依願免	②27.12.26西源四郎（外務省参事官）→⑧30.4.10免 ⑦30.1.20神鞭知常（法制局長官）→⑦30.10.28免
	熊野敏三（司法省参事官） 本尾敬三郎（〔大審院〕判事） 中村元嘉（〔大審院〕判事）	箕作麟祥（行政裁判所評定官）〔貴〕→⑬30.12.1死去 南部甕男（〔大審院〕判事） 横田国臣（司法省民刑局長）→⑭31.1.24免 田部芳（司法省参事官） 長谷川喬（〔大審院〕判事） 井上正一（〔大審院〕判事） 高木豊三（〔大審院〕判事）	①27.4.26中村元嘉（〔大審院〕判事） ⑦30.1.20河村譲三郎（司法省参事官） 富谷鉎太郎（〔大審院〕判事） ⑩30.9.22内田嘉吉（高等海員審判所理事官） ⑮31.2.9小宮三保松（〔東京控訴院〕検事） ⑯31.2.12倉富勇三郎（司法省参事官）
帝国大学教授		穂積陳重（法科大学教授）〔貴〕 富井政章（法科大学教授）〔貴〕 梅謙次郎（法科大学教授） 土方寧（法科大学教授） 穂積八束（法科大学教授）	④28.12.12岡野敬次郎（法科大学教授） ⑫30.11.25寺尾亨（東京帝国大学法科大学教授）
帝国議会議員其他学識経験アル者	大岡育造〔弁護士，衆・政府系〕 関直彦〔弁護士，衆・政府系〕 小笠原貞信〔弁護士，衆・自由党〕 岡村輝彦〔弁護士〕 江木衷〔弁護士〕	菊池武夫〔弁護士，貴〕 鳩山秀夫〔弁護士，衆・改進党〕 元田肇〔弁護士，衆・対外硬派〕 星亨〔弁護士，衆・自由党〕→③28.5.1免 三崎亀之助〔弁護士，衆・自由党〕→⑦30.1.20免 山田喜之助〔弁護士，衆・改進党〕→⑦30.1.20免 磯部四郎〔弁護士〕 岸本辰雄〔弁護士〕	③28.5.1重岡薫五郎〔衆・自由党〕
	細川潤次郎（女子高等師範学校長）〔貴〕 小中村清矩〔元・文科大学教授，貴〕 千家尊福〔貴〕 河島醇〔衆・対外硬派〕 山田東次〔衆・自由党〕 島田三郎〔衆・改進党〕 高田早苗〔衆・改進党〕	三浦安（東京府知事） 木下広次（文部省専門学務局長）〔貴〕→⑦30.1.20免 尾崎三良〔元・元老院議官，貴〕 村田保〔元・元老院議官，貴〕	
	渋沢栄一〔実業家，貴〕 阿部泰蔵〔実業家〕 末延道成〔実業家〕		⑦30.1.20渋沢栄一〔実業家・貴〕 阿部泰蔵〔実業家〕 鶴原定吉〔実業家〕 ⑧30.9.17加藤正義〔実業家〕

1 | 河村譲三郎は安政6年2月19日生まれ[1]、京都府士族（維新前不明）不破確蔵の三男、のち滋賀・大津の円万寺寺侍・河村真秀の養子となる（その後明治19年8月家督相続）。明治9年7月司法省法学校入学時の順位は104名中92位と非常に悪いが、これは入試科目——①「論語」の弁書（べんがき）（原文を字解・解疑・及余論の三段に分けて説明させる試験）と②「資治通鑑」の白文訓点（句読点・返り点を打たせる試験）——のせいかもしれない（司法官には漢学の素養も必要との大木喬任司法卿の意向による）。入学半年後の明治10年2月の席次は2位、15年2月の席次は3位、17年7月の卒業時の席次は2位と、一貫して優等生である[2]。身体は虚弱で、河村自身の言によれば、「全国より募集された子弟が百面余同時に入学したが、間もなく病で斃れたものが二三人あった、自分も風土が変った為め、重き胃腸病に罹り身体が衰弱して、からうじて学科に堪へた程である此次は河村の番だと同窓が窃かに評したそうである[3]」。一方、性格は「此頃から老成的で余り広く交はらなかった[4]」。

2 | 卒業後は司法省御用掛（翻訳課・学務課）、同年12月母校の文部省移管・東京法学校への改称の際に文部省御用掛（本科教員）兼勤。明治19年2月欧州派遣の15名の司法官の一員（横田国臣・高木豊三・田部芳・小宮三保松・富谷鉎太郎と河村の6名が後に法典調査会委員）として渡独、ライプツィヒ大学・ミュンヘン大学に学び[5]、23年10月帰国後は11月司法省参事官、24年8月東京控訴院判事、25年11月前橋地方裁判所長、法典調査会時代の26年12月司法省参事官となり28年11月法制局参事官兼任、31年6月から大審院検事兼任。

3 | 明治36年9月には司法省民刑局長となり、在職中にはハーグ国際私法会議加盟のための政府委員として37年5月第4回会議に派遣される。時は日露戦争の最中であったが「一体河村君は御役所の内外を通じて何時でも威容儼然と云ふ方で一語も苟くせず一笑も損せぬ様にと云ふ性質であるがコー云ふ人は又ドコ迄も夫れで押し通すから」同席したロシアの政府委員は接し方に窮したらしい[6]。その後39年1月には司法次官に昇るが、その際にも「君の如き儒者風の人物にて事実上大臣の仕事を為す司法次官の仕事が首尾克く出来るや否、疑問なりといふべし」「次官河村譲三郎氏は可もなく不可もなく、一意職務に忠実なる人にして、主張も相応にある由なれども、兎角遠慮勝にて或者の跋扈を防ぐ能はざる由」などと評されている[7]。

4 | 明治44年9月免官。だが、同年の貴族院議員の欠員枠（9名。河島醇らの死去による）には勅選されず、翌45年の欠員枠（5名。菊池武夫・穂積八束らの死去による）で大正元年12月勅選。その間の事情は、「河村譲三郎氏の推薦に至っては是れ亦た当然の事で、実は氏は昨年桂〔太郎〕内閣倒壊の折り、他の次官連と一緒に当然勅選されるべき筈の処、途中から徳富〔猪一郎（蘇峰）〕氏が割り込んできたので、遂に氏だけ落ちた。岡部〔長職〕法相は之を非常に憤慨し、盛んに桂公に運動を試みたのみならず、研究会〔＝後に富谷鉎太郎も所属した貴族院の会派〕少壮連も自分方の岡部法相の推薦が排斥せられたとあっては取りも直さず研究会を侮辱したものだと怒り出すやら波乱を起こしたのである。そこで岡部子爵は手を代えて西園寺〔公望〕侯爵に頼み込んだが、河村氏は以前松田〔正久〕現法相の下にも次官を勤めた関係もあり、且又司法省部内にても河村氏を気の毒がる人も多いので、今度は松田氏が氏を推薦した様な訳で、世間の評判は何れも西園寺侯の雅量を称して居る様だ[8]」。

5 | 昭和5年4月14日心臓内膜炎に肺炎を併発し東京・荏原町中延の自邸で死去。墓所は青山墓地。

［組織再編後の委員①］

河村譲三郎

かわむら・じょうざぶろう（1859-1930）

法律新聞253号（1905年）2頁より。

1） 成瀬麟＝土屋秀太郎（編）『大日本人物誌』（八紘社、1913年）か80頁、『帝国法曹大観』（帝国法曹大観編纂会、1915年）24頁。
2） 手塚豊「司法省法学校小史」『手塚豊著作集（第9巻）』（慶応通信、1988年）64頁、80頁。
3） 法律日日115号（1910年）15頁。
4） 「之に反して気抜であったのが桜井一久君古賀〔廉造〕君末弘〔厳石〕君などで小宮三保松君は頭髪を綺麗に分けて居ると云ふ風で乱暴ではなかった」飯田宏作（談）「司法省法学校時代の風潮（続）」法律新聞434号（1907年）20頁。
5） Rudolf HARTMANN, *Japanische Studenten an deutschen Universitäten und Hochschulen. 1868-1914*, Mori-Ôgai-Gedenkstätte, Berlin, 2005, S.79.
6） 法律新聞225号（1904年）26頁。
7） 日本弁護士協会録事94号（1906年）88頁、89頁。
8） 法律新聞829号（1912年）15頁。

1｜富谷鉎太郎は、旧宇都宮藩士・富谷豊義の長男として安政３年10月５日宇都宮に生まれた。明治９年７月司法省法学校（正則科第２期生）入学時の成績は40位、半年後の10年２月の席次は45位、15年２月の席次は10位、17年７月卒業時の席次は７位[8]。

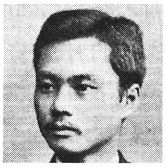
2｜卒業後は司法省御用掛（学事課勤務）、同年12月母校の文部省移管・東京法学校の名称変更後は文部省御用掛兼任。同期で同様のキャリアパスには梅謙次郎・河村譲三郎・手塚太郎・河村善益がいるが、梅・河村譲三郎は本科、手塚が予科の「教員」であるのに対し、富谷と河村善益は生徒を取り締まる「監事掛」。前三者が頭脳採用であるのに対し、後二者はいずれも山岡鉄舟に就いて無刀流を学んだ剣術の腕を買われての肉体採用である[9]。明治19年２月司法省留学生（同期の田部芳・小宮三保松・河村譲三郎・前田孝階のほか17年東京大学法学部卒業の石渡敏一の計６名）として渡欧、ベルリン大学・シュトラスブルク大学・ライプツィヒ大学で学ぶ。23年６月帰国の石渡・小宮・田部・前田・富谷は翌７月揃って判事試補（東京始審裁判所詰）、翌８月検事となるが、小宮は伊藤博文に見出され９月貴族院書記官（兼任）、石渡は11月司法省参事官、田部は10月に東京控訴院判事、前田は治安裁判所判事、富谷も名古屋控訴院判事、翌24年富谷は東京控訴院判事、石渡も東京控訴院検事、その後26年富谷は東京控訴院部長に昇るが、彼の上席には宮城控訴院判事・東京控訴院判事・水戸地方裁判所長を経て東京控訴院部長となった前田が座った。一方、小宮は26年辞官するが28年東京控訴院検事に復帰。田部は26年司法省参事官に転じ、26～28年富谷とともに帝国大学法科大学講師（商法担当[10]）といった具合に明治19年司法省留学組６名の出世は同一歩調である。

3｜だが、明治30年代以降、彼らの出世競争には明暗が生ずる。明治31年６月28日に横田国臣＝高木豊三＝加太邦憲の断行した老朽司法官の淘汰に関しては以前に触れた[11]。彼らもまた明治19年留学組であるが、その際に石渡・河村・田部は大審院検事に昇り、前田も加太の後任の東京地方裁判所長に栄進し、同年12月には小宮も大審院検事となるが、これに対して、富谷は前田の抜けた東京控訴院で上席に移ったにすぎない。だが、その後富谷は前田を追い抜き33年12月大審院判事、36年12月大審院部長に昇る（前田は38年11月宮城控訴院長となり在職中の43年４月に死去）。しかし、石渡は35年10月司法省民刑局長、36年９月司法総務長官（12月より司法次官に名称復帰）、河村は36年９月石渡後任の民刑局長、39年１月石渡が内閣書記官長に転じた後の司法次官に昇った。富谷に運がめぐってくるのは、石渡・河村のリタイア後（石渡は40年12月貴族院議員に勅選され41年１月免官、河村は44年９月免官後大正元年12月貴族院議員に勅選）、大正元年12月東京控訴院長・長谷川喬が死去したのである。長谷川の後任となった富谷は、さらに大正10年定年制の導入により退職を余儀なくされた横田国臣の後を襲って大審院長の座を得る。しかし、富谷にもまた定年が迫っており、彼の院長在職期間は４か月にも満たなかった（６月13日より10月５日まで）。

4｜退職後は大正11年２月より貴族院議員。また大正10年６月～13年11月明治大学総長。昭和５年11月16日信濃町駅前で市電にはねられ慶応病院に搬送。この時は一命を取り留めるが、昭和11年５月５日早朝自邸で日課の庭掃除をしている際に板塀ごと隣家に転落して死亡。

5｜富谷は東京控訴院長時代、管内の地方裁判所部長会同の席上、耳打ちで用件を伝えようとした書記長を「裁判所に秘密はない。又あるべき筈がない。列席の判事諸君に聞かせてならぬようなことは、私は聞くを欲しない。又聞く必要がない」と一喝。三淵忠彦（後の最高裁初代長官。当時東京地裁部長）は「こんなことは、考えて見たこともなかったので、痛く驚いた[12]」。

［組織再編後の委員②］



富谷鉎太郎

とみたに・せいたろう（1856-1936）

法律新聞 393 号（1906 年）１頁より。

8）手塚・前掲注２）67頁、80頁。

9）なお、飯田・前掲注４）19頁によれば、司法省法学校において「体操は学科の一つに算へられてはあったが、誰もやる者がない、唯学生中で或は撃剣道具を買って而して撃剣をやる、其連中では富谷（鉎太郎）君が一番上手であった」という。

10）本連載（10）「田部芳」本誌662号（2010年）74頁参照。なお、田部は、富谷の妻ヤス子の兄でもある。

11）本連載（12）「外伝⑦」本誌664号（2010年）72頁。

12）三淵忠彦『世間と人間』（朝日新聞社、1950年）107頁。

（しちのへ・かつひこ）